

る。吉富院長は「ワクチンを打つ意義を理解し、接種を積極的に検討してほしい」とする。

自治体も周知を図っており、福岡市では広報紙や医療機関で案内しているほか、母子手帳アプリで対象となる直前の妊婦に通知している。

風邪と見分けがつきにくく、数日後に皮膚の発疹が全身に広がった頃に診断がつくのが一般的だ。肺炎や中耳炎のほか、脳に炎症を起こす脳炎などの重篤な合併症を引き起こすこともある。しかし、先進国でも1000人に1人程度の割合

乳児のRSウイルス感染症の重症化を予防する妊婦向けのワクチンについて、公費での定期接種が今年度から始まった。対象は妊娠28〜36週の妊婦。無料で受けることができる。

RSウイルスは、発熱やせきなど風邪のような症状が出る呼吸器感染症で、2歳までこまめに

妊婦向け接種 無料に

みを利用する。2024年5月末から全額自己負担(3万~4万円)での任意接種が始まった。

同年6月から接種を行う福岡県那珂川市のマミーズクリニックスの吉富智幸院長は「RSウイルスは対症療法しかなく、ワクチンは赤ちゃんを守るために有効な方法が」と話す。創設

合で亡くなる怖い病気だ。

国内では今年は6月時点で昨年1年間の2倍にあたる500人超の患者の報告があり、流行が危惧されている。今回の感染拡大は海外から持ち込まれたウイルスによるところが大きい。

世界中で流行しており、コロナ禍後に海外との往来が回復していることも一因だ。

国内の一定数の人がはしかに対する免疫を持ってお

らず、その中で感染を繰り返していることも影響している。手洗いやマスクでは感染を防げず、麻疹ウイルスを弱毒化した麻疹ワクチンの接種が唯一の予防法になる。ただ、1回の接種では、接種を受けた人の約5%で十分な免疫がつかないことが分かっており、2回接種が推奨されている。

今回は2回接種を受けた人にも感染が確認されているが、感染しても重症化

重症化や合併症 抑制にも効果

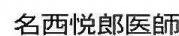
や重篤な合併症をほぼ完全に予防できる。周囲に感染させる力も非常に弱くなるため、1歳未満や妊婦、がん治療中の患者ら接種を受けられず、重症化しやすい人を守ることにもつながる。

症状が出る1日前から、解熱後3日までの間は感染を広げる可能性があると考えられる。症状が出た場合、医療機関に事前に連絡して受診の流れについて指示を仰いでほしい。

特効薬はなく、ワクチンで防ぐ病気だ。これを機にご自身、お子さんの接種歴を母子手帳などで確認してもらいたい。分らない場合、かかりつけ医に相談してワクチン接種など必要ない対策を講じてほしい。

（聞き手・今村知寛）

福岡市立こども病院の医師が病気の症状や予防法を解説する「＃子育て処方せん」。今回は、今年に入って感染が拡大している「はしか（麻疹）」について、小児感染免疫科長の名西悦郎医師に聞いた。



予
防
法
ワ
ク
チ
ン
の
み

令和8年7月8日読売新聞西部本社版